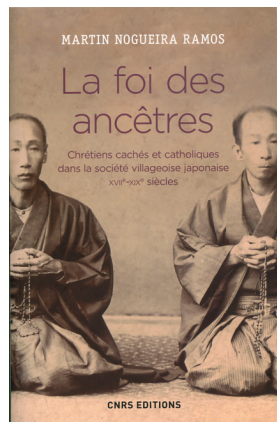


マルタン・ノゲイラ・ラモース^①

『祖先の信仰——十七世紀から十九世紀までの日本村落
社会におけるかくれキリシタンとカトリック信者』

Martin Nogueira Ramos, *La foi des ancêtres: Chrétiens cachés et catholiques dans la société villageoise japonaise, XVII^e-XIX^e siècles*

阿部隆夫



Paris: CNRS Editions, 2019

本書は、日本史上で通例「かくれキリシタン」、「潜伏キリシタン」と称されているキリスト信仰者とその子孫世代が十七世紀から十九世紀まで農村、漁村の地域社会の中でどのようにキリスト信仰を維持していたかをフランス語で詳説する著書である。著者は、フランス国立極東学院 (l'École française d'Extrême-Orient) 所属の講師としてこの学院の京都支部長を務めている。本書が網羅する期間は一五八七年から一八八四年までで、特に一八六五年からの二十年間を詳細に記述している。地理的にはキリシタンの子孫が多い現在の長崎市内、外海地区、五島列島を網羅しており、特に長崎市内の浦上地区の記述が詳しい。なお著者は、「かくれ」と「潜伏」を使い分けず同義語として扱っている。また *Crissao* や *Kristian* という歴史的な名称ではなく、現代フランス語の *chrétiens*

を基に *chrétiens cachés* (かくれキリシタン)、*crypto-chrétiens* (潜伏キリシタン) という名称を使用している。しかし本稿では、「キリシタン」を便宜上用いた。

用いられた史料は、二種類に大別される。第一にローマやパリの古文書館にある宣教報告書である。第二に二十世紀中葉から日本人学者らによつて出版されている多数のキリシタン研究である。日本語史料の引用は、日本の歴史家が古文書に基づいて記した多数の二次史料からのものがほぼ全てである。

本書『祖先の信仰』は、序章と終章以外、十七世紀から十九世紀までの時間軸に沿って六章で構成している。まず序章では、歴史学上の問題提起の後、カトリックとかくれ・潜伏キリシタンに関する日本での先行研究の紹介をしている。次に第一章では、

「十七世紀の潜伏キリシタンのルーツ」という表題で、民衆に広まったキリシタン信仰が中央封建国家権力に弾圧され宣教活動と信仰行事が禁止される中、キリシタン信仰が潜伏活動に変貌していった過程が述べられている。一五八七年の伴天連追放令から始まり、その後の一六一四年の徳川幕府による禁令、幕府による一六三〇年代の島原天草の動乱の制圧と一六四〇年代の貿易独占化を経て、一六六〇年頃までの事象が記述されている。その中でも重点が置かれているのが天草島原の動乱であり、幕府が禁令を強化する主因となったキリシタンの反体制活動となったとされている。

第二章「一七九〇年から一八六五年までの潜伏キリシタンの歴史断片」では、宣教師不在の中での潜伏キリシタン村落の動向が三点に要約されている。まず、キリシタン農村民が信仰儀式を先祖代々から受け継ぎながら組織化し土着化していったこと、次に幕府のキリシタン弾圧が十七世紀で終焉し、肥前と肥後の代官らは信仰異端分子の摘発よりも石高分の税収源として村落秩序の安定維持に重点を移していったことが述べられている。第三に、生計維持のため周辺地域に移住する村民がいたため、肥前の長崎浦上地区、外海地区、平戸、生月、五島列島、肥後の天草などでは、地域の中で社会階層化したキリシタンの村落がお互いに他の地域のキリシタン村落と連携しながら存続していったことが指摘されて

いる。

続く第三章から第六章までが、本書の核心部分である。第三章「宣教師再来と宣教活動開始」では幕末の貿易統制解除から明治時代初期におけるバリ外国宣教師の肥前、肥後での宣教活動の概略が記されている。一八六五年以降フランスから宣教師が来日し、正統カトリック信仰を広め伝えていった。宣教師がキリシタン村落を普遍的なカトリシズムで統制し、宣教師が中心となる社会秩序に置き換えようと努めた。著者は、このような秩序変換は各地のキリシタン村落の指導者が集落を従えて宣教師に従った結果である、と述べている。

第四章「祖先信仰の固持、土着キリシタンの信仰習慣の分析」では、潜伏キリシタン村民がどのような土着の信仰習慣を保持していたか、そして何故カトリシズムに再帰化した集落があったのかを説明している。以下がこの章の要約である。潜伏キリシタンにとって死後の救済が関心事であり、全員がとはならずとも多くのキリシタンがその救済のためにカトリシズムに帰化した。即ち村落社会の中で祖先とつながる信仰を守るために村民達だけの間で排他的に密かに信仰が維持され、自分達の信仰以外の信仰が退けられていった。教義そのものよりも村落での慣例儀式が重視されてきた。そのような状況下でのフランス人宣教師によるカトリシズムの再来は、カトリシズムに帰化した者にとってはキリシタ

ンの子孫としてミレナリアニズム（千年王国説、至福千年説）の信仰に基づいた待望の奇跡であり、正統な秘跡を受け入れることによって祖先との繋がりを確保するものであった。

第五章「在来権力がキリシタンによる脅威の復活に直面する（一八六五年―一八八九年）」では、幕末から明治時代までの為政者らがヨーロッパ人宣教団の入国とともに展開された長崎浦上地区での対かくれキリシタン、対カトリック信者政策の変遷をまとめている。幕末の一八六五年にパリ外国宣教団が浦上地区で宣教に着手したが、最初の二年間は長崎の代官に黙認されていた。大政奉還後の明治時代になり長崎県の役人によって元来潜伏キリシタンであつた集落に対する弾圧が始まったが、村民達は表向き服従しながらも密かにカトリック信仰を固持した。禁制が解除された一八七三年以降はカトリック信者に対する弾圧は緩んだが、一神教的な信者達と宣教師の存在が村民間で軋轢を生むようになった。

第六章「十九世紀末の村落社会でのカトリシズム、この信者達は反体制的な集団か？」では、主に長崎でフランス人宣教師の下、信者数の増加と教会の組織化が進む中で、キリシタンの村落での社会的人間関係の変化がまとめられている。要約すると、宣教が公然化した一八七三年の時点では、宣教師達は村民集落に対して直接的な管理支配ができていなかった。その後二十年間の活動と信者の協力でカトリック村民が増えていったが、集落内で亀裂も

生じた。

終章「非キリシタン村落とほぼ差がない村落」で、著者は潜伏キリシタン村落に関してフランス語圏読者に向けて三点の主張を展開して締めくくっている。第一の要点は、明治初期の五年間を除いてキリシタン禁制が二世紀の間で形骸化していたことである。第二の要点は、潜伏キリシタン村落民が実は他の地域の非キリシタン村落民と同じように周辺地方の村落と連携しながら社会経済生活を営んでおり、決して社会から潜伏し孤立していたわけではないということである。第三の要点として挙げられていることは、隠れキリシタン村民が決して社会の下層民だけでなく村落全体の上から下までの社会階層全体の集団であつたことである。

上記三点とも日本人読者には常識の範囲内のことであり意外性も見当たらない。まず幕藩体制の財政基盤である石高制を支えていた農民を長期にわたり多数処刑することは、体制維持と矛盾することであつた。また、「潜伏」や「かくれ」が示す意味が物理的な潜伏ではなく、表面的に従順な領民として年貢を納めながらその集落が先祖代々の土着信仰を守っていたということはすでに周知されている。農村では田畑の遺産分割による貧困化を防ぐため長男相続が常態であり、田畑の割り当てがない長男以外の子孫の移住が周辺地域まで地縁、血縁を拡大し各地の村落が相互連携したことは、目新しい事柄ではない。また仏教や神道の行事のよう

に地域ぐるみの参加が慣習であった農村では、土着化したキリシタン信仰実践も集落単位が基本であり、集落全体の儀式や祭りごとへの参加が下層民に限定されることはあり得なかつた。

しかし本書がフランス語圏の読者のために著されたという観点から結論を吟味すると、著者の主張が有意義であり読者を啓蒙する重要な内容であることがわかる。第一に、フランス語圏読者にとっては、禁制下で弾圧がいつの間にか止んでいた史実には説明が不可欠である。ヨーロッパ史ではローマ帝国でのカトリック迫害、及びユグノー戦争やドイツ三十年戦争などでの信者弾圧には通例、講和条約や勅令などで終了が公示された。そのため最後まで禁令廃止を公示しなかつた幕府の対応は、ヨーロッパ史的通念では理解しにくい。第二に、「潜伏」としてヨーロッパ史で思い起こされるのは、ナチス占領下でのユダヤ住民の潜伏や第二次世界大戦中のドイツ軍に対抗したフランス人潜伏者のレジスタンスである。「潜伏」や「かくれ」の第一印象はこのような連想の延長上にあり、十分な説明がないと潜伏キリシタンが社会から隠れて孤立していたと誤解される可能性がある。更には徳川時代の小作人のことをヨーロッパの封建領主の所有物であり自由に移住できない農奴と同一視しかねない読者のために、日本の農村民の中には自らの意思で移住できた者がいたことを強調することは適切な判断である。第三に、潜伏が文字通りの「潜伏」でない以上、読

者の不必要な誤解を避けるため、潜伏キリシタンが集落全体の社会階層で構成されていたことを指摘することには意義がある。

本書がフランス語圏の一般読者向けの本であるとするならば、細部に関して更に詳しい説明や実証の必要性が少なくとも二項目で必要となる。まず著者は島原天草の動乱をキリシタンの反乱として位置付けているが、読者向けの説明が充分だとは言えない感がある。この動乱は幕府がカトリック国勢力を排除していた最中の事件であり、禁制の正当化に利用されたことは否めない。しかしこのままでは、読者はこの動乱をヨーロッパでの信仰圏の覇権をめぐる前述の諸戦争と同類の事件だと誤解してしまう恐れがある。フランス語読者向けに説明するためには、単にキリシタンの反乱として扱うべきではない。この動乱の第一義は、キリシタンである以前に農民が起こした一揆であつたことである。第二義は、その農民たちがキリシタンという結束の下ながらも世俗支配勢力に反抗したのであつて対立信仰勢力に反抗したのではないということである。また、農民一揆は島原に特有のことではなく徳川政権時代に全国各地で頻繁に起こつた事象である。

また実証が必要な項目として、潜伏キリシタンが自らのミレナリアニズムの思想ゆえに奇跡としてフランス人宣教団を受け入れられたという第四章の議論がある。著者は、日本のキリシタン信者達の間には幕末の世直し運動にみられるようにミレナリアニズ

ム思想があつたと記している。カトリシズムの伝統が強く残るフランスやケベックなどの読者にミレナリアニズムという用語を使用するのならば、少なくともそれがカトリシズムの用語なのかそれとも末法思想にみられるような一般的亡国思想を指すのかは明示する必要があるだろう。更にはミレナリアニズム自体が宣教師団歓迎の動機づけとなつたと説くのであれば、潜伏キリシタン達が信仰の一部としてミレナリアニズムを祖先から受け継いでいたこと、そして宣教師が信者にこの思想を後付けで教え込んだのではないことを証明する必要がある。この件に関しては本書に限らず史料が少なく、著者は推測の域を出していない。

最後に、本書には三つの特長がある。第一に、この著書が日本史と日本の慣習に詳しくないフランス語圏の一般読者層に対して、潜伏キリシタンがどのような社会生活、経済生活を送っていたのかをヨーロッパ的発想から生じる誤解を回避するように説明していることである。第二に、昭和時代から蓄積されてきた潜伏キリシタン、かくれキリシタン関連の一次史料に基づく研究の成果をこの一冊に集約して、和書が読めない者にも分かるように提示していることである。第三に、母語がフランス語でないと解読し難いパリ外国宣教師団の手書き史料を豊富に紹介していることである。日本語以外にフランス語も解する読者には、有用な史料集兼概説書となろう。

注

(1) 著者名を可能な限り忠実に読者に紹介するためにも、本稿ではあくまでもフランス語原音に最も近い仮名表記を採用した。他の和書論文で「マルタン・ノゲラ・ラモス」のように音引きが避けられた著者表記も見受けられるが、これはフランス語発音からかけ離れた不適切な仮名表記である。